

(平成17) 年度活動報告書

日中関係史

今年の活動で反省すべきは、普段の研究会や講演会の開催が少なかったことである。この数年、毎年反省してどうしても改められないが、やはり次年度を期したいと思う。以下にやれたこと、これからの期間でやる予定のことを記す。

○講演会

6月3日14時40分～17時

講師、朱建栄氏（東洋学園大学教授）「2000年「反日」を考える」

コメントは田畑光永氏（本学国際経営学部教授）にお願いした。4月に中国の都市部で起こった「反日デモ」についてのホットな話題であり、100名の参加を得て熱のこもった講演と質疑応答になった。なお、この時の朱氏の講演内容は、『神奈川大学評論』52号に掲載されている。

○研究会

グループ参加者の一部が科研費基盤研究（B）「東アジアにおける学の連鎖」の共同研究を行って3年目となり最終年度の活動をしてきたが、これまで4回の研究会を開いてきた（第1回が4月23日、2回が6月11日、3回は8月5日、4回は10月21日）。そのうち2回目には戸川芳郎氏（東京大学名誉教授）、3回目は徐一平氏（北京日本学研究中心主任）に報告していただいた。なお、第5回を2月15日に開き、6回目の3月3日には、4人の若手研究者による研究報告を行い、4日には3年間のまとめとして、中国から南開大学劉曉琴氏、徐州師範大学周棉氏、台湾から国史館林清芬氏を招いて「中国人留学生と日中戦争」と題するシンポジウムを開くことにしている。

○現地調査

旧日本租界の現況を調査するため、富井、孫、村井、大里の4名が9月17～23日漢口と上海に出かけた。漢口では、武漢理工大学李百浩氏、上海では、東華大学陳祖恩氏、華東師範大学易惠莉氏に協力していただいた。なお上海では、本学に留学して今は現地で活躍する中国の皆さんとの交流会を開き、大いに盛り上がった。

○論文集出版

1. 数年来取り組んできた租界史研究の成果を本研究所叢書の1冊として出版する（3月、御茶の水書房から刊行）。題名は『中国における日本租界—重慶、漢口、杭州、上海』である。執筆はメンバーの外、上海、武漢の研究者にもお願いした。おかげで、充実した内容に仕上がったと自負している。
2. 上記科研費による共同研究の成果は、本所報に4篇（三好、孫、川島、大里）載せることができた。

2005年度「文化のかたち」研究会活動報告書

1. テーマ：21世紀の新千年にふさわしい総合的な文化や文明の把握を目指し、新しい、「知の地平」を切り拓く。

2. 代表者：水野 晴光

3. 活動内容：新しいメンバーを迎え入れて総勢16名となった。今年のグループ研究は、個々の会員の研究活動に委ね、11月12日（土）本学人文研究所主催の国際学術シンポジウム「世界から見た日本文化——多文化共生社会の構築のために——」特別記念講演にコロンビア大学名誉教授の دونالد・キーン博士とモスクワ大学のV・イワノフ博士を招聘することに全力を賭けた。しかしながら、生憎V・イワノフ博士が脚を痛められ、特別記念講演に来日出来なくなったため、急遽イワノフ博士のご推薦でモスクワ大学ロシア科学アカデミー主任調査官のD・ラゴージン氏に講演を代行して戴いたが、この特別記念講演の企画自体は全体としてほぼ成功したと考えてよいであろう。

今後は、約3年に亘ってこのシンポジウムの記念資料集を含む叢書の出版に向けて着手する予定である。

(水野晴光)

共同研究グループ活動報告

西洋文化の受容

一昨年に、それまでのまとめとして『『明六雑誌』とその周辺—西洋文化の受容・思想と言語』を出版したあと、もう少しその範囲を拡げて、『明六雑誌』と同時代の他の諸雑誌の研究もと、再出発した当研究グループあったが、本年度も残念ながら共同研究者たちの多忙その他の理由により、活動報告としては何ら見るべきものないまま過ごしてしまった。

唯一の活動は、当研究グループと「物語論」の研究グループとが合同して結成された「表象としての日本」の共同研究グループによる2005年9月の箱根保養所における研究合宿のみであった。

次年度からは、本共同研究グループの共同研究員の過半数が所属することになる、新学科「国際文化交流学科」が発足するので、これと関係がなくもない「西洋文化の受容」共同研究グループとしてはそろそろ休眠状態から脱して、活動化させていきたいと思っている

(鈴木修一)

物語研究

1. 研究テーマ：物語の構造分析、歴史叙述と文学

2. 代表者：日高昭二

3. 活動内容：物語研究会は、本年度は、メンバーの大半が「2005年度 神奈川大学共同研究奨励助成」に申請し、その結果大学から採用されたために、研究会としては個別の研究会などは開かれていない。ちなみに、「共同研究奨励助成」のテーマは、「表象としての〈日本〉—国際日本学の新展開」で、こちらの代表も日高が兼ねているために、そのような状況になったのである。もとより、この双方とも大学の学術研究の一環として存在するわけであるから、当分は研究会や講演会なども

「物語研究」と「共同研究」の二つを重ねるかたちで開催していきたい。

(日高昭二)

各国地方史の比較的研究

本共同研究グループは、世界史を現存する国家、民族、文明というレベルで考察するのではなく、地方史という地域概念から見直すことを研究テーマとして取り上げ、年に4回の研究会を開き、各回、中国研究者と他分野研究者の2名の発表を行なうことを目指している。

2005年3月には代表の小林一美氏が退職し、孫安石が代表を引継いたが、まだ進むべき方向が定まらず、今年度には2回の研究会を開いたことにとどまった。次年度以降は外部からの講演者を招き、活動の充実を図りたい。

(1) 2005年7月1日

報告者：廣田律子 (本学経営学部・教授)

テーマ：「呪術としての鉄火」

(2) 2005年11月11日

報告者：小馬徹 (本学外国語学部・教授)

テーマ：「地方史研究とは何かーケニアのキプシギス人最初の『地方史誌』BURETIを糸口として考える」

廣田氏の報告は中国の西南少数民族の民間宗教が1980年代以降、復活する様子を説明した上、最近の追儺の祭りに上演される仮面芸能、そして、火渡りなどの呪術的な性格をもつ民間芸能がどのように行われているのかを、報告者が撮影したビデオなどを通して紹介するものであった。

小馬氏の報告は、本共同研究グループが取り上げる「地方史研究」をアフリカからの視点で問い直すものであった。とくに、1999年に刊行されたキプシギスの歴史書であるBureti:Focusing into the Next Millenium, 1st Anniversary (Lull Computer Services, Litein, Buret,Kenya,1999)以前の歴史が民族史や氏族史に比重をおいたものであることに比べ、BURETIの記述はキリスト教に関する内容が突出しており、氏族や血縁など前近代の文化とは独立した近代的な文化の属性に注目しているなどの特徴が見出されると指摘した。

(孫安石)

自然観研究班

今年度は、復本一郎・経営学部教授が幹事として、講演会を開催した。2005年12月7日(水)、神奈川大学人文研究所会議室において行なわれた。復本教授の招きにより、松井貴子・宇都宮大学助教授が「フォントナーズの自然形象」という演題で話をされた。

平塚キャンパスからの先生方、横浜キャンパス広報部の方々も出席されて、このグループの今までの

講演会で最も盛況であった。

(文責 佐藤夏生)

東アジア比較文化研究会

COE関連事業の下記のワークショップを後援した。

「祓いの儀礼と技法」

- ・ 2005年7月23日 13:30～16:00
- ・ 神奈川大学横浜キャンパス 17号館215室

- ・ 顧希佳先生 (杭州師範学院 教授)
「呉越神歌の文化史意義—祓いの儀礼からみた—」
- ・ アレクサンドル・グラ (立命館大学 専任講師)
「追儺儀礼における方相氏の役割の変化」

- ・ コメンテーター 廣田 律子 (神奈川大学 教授)

- ・ 企画・主催 中国言語文化専攻

(山口建治)

色彩語の社会言語学的研究

1. 活動内容 特になし (2006年1月に代表者が交代した)。

2. 購入図書 (申請)

- ・ Munsell Book of Color : Nearly Neutral Collection, 出版年無指定,
(代) 海外ブック (合)。
- ・ NCS Atlas 1950 original 第3版, 1996, (代) 海外ブック (合)。
- ・ 「色彩ワンポイント 全10巻」, 1996, 日本規格協会。
- ・ 「景観法を活用するための環境色彩計画」, 吉田慎悟, 2005, 丸善。
- ・ 「英語の感覚と表現—共感覚表現の魅力に迫る—」, 2005, 吉村耕治編著, 三修社。
- ・ J.アプルトン (菅野弘久訳) 「風景の知覚—景観の美について—」, 2005, 法政大学出版局。

(三星宗雄)

横浜研究会活動報告

1. 横浜研究会（横倉・永野・後藤（政）・平井・寺沢・福畠・富谷・尹（亭）・後藤（晃）・兼子・大里・孫・阿部・福元）
2. 研究会・シンポジウム・研究活動 本研究会は、「多文化共生社会の創出と日本社会の変容ー神奈川県横浜地域を中心にー」を研究課題として、'04, '05年度に神奈川県共同研究奨励金にもとづく研究活動を行ってきた。'05年度の研究活動については別稿を参照していただければ幸いである。
3. 今後の研究活動（予定）共同研究奨励金にもとづく研究は'05年度をもって終了する。これまでの研究活動によって、グローバル化の一環としての外国移住者の増加に伴う日本社会の変容及び彼らの生活・就労実態などについて認識を深めることができた。その成果については、2月から3月にかけて執筆の学長宛報告書にまとめる予定である。本研究では'06年度以降も調査研究を行い、'07年度にはその成果を公刊したいと考えている。

（横倉節夫）